

そして瘦身を濃紺に包んだ姿とが、不思議に満目蕭条たる風景にマツチするのだ。だから彼が主演俳優で曠野に立つシーンがあったら、私は脚本に多少忠実さを欠いてもより荒涼たる曠野を作るだろう。そんな考えを楽しみながら、群馬県と長野県の県境まで来た。最高の条件を得たと思つて、私は彼の近づくのを待つてカメラのシャッターレリーズを押した。これは昨年の六月号の口絵にのせた「火山灰地」と題する一枚の写真である。

ジエーム・ステインが肩をそびやかして足早に街中を歩いている写真がアサヒカメラにのつたことがある。私はあの写真は好きだが、この浅間でとつた今井氏の写真は同じように好きだ。そして愛着を持つてゐる。

さしもの荒涼たる浅間高原も、峰の茶屋から南表になると、急傾斜とともに趣を替えてくる。とくに千ガ滝から中軽井沢の駅まで一気に下る舗装路は、サイクリストたちにとって忘れさせるだろう。私も一気に入りに下りてしまった。ただ、このダウンヒルで落車して死んだ長森嬢のことは、さすがに想い出されて哀れに思えた。

4・追分

追分の変化は私を驚かした。一昨年、追分で自転車を受取つて千曲川をさかのぼる旅をはじめたとき、まず、追分の宿の跡にさしかかった。草叢の高みが右に北国街道左に中山道と道を分けていた。牛馬を左右

に追分けるという意味から道の分岐点を追分と名付けた昔の人の意志が、その小高い草叢に残されていた。水でさえこの道の流れにくれば必ずから左右に流れを分けるだろうと思われぬくらい、自然な形の、いかにも追分らしい追分の宿の跡であつた。

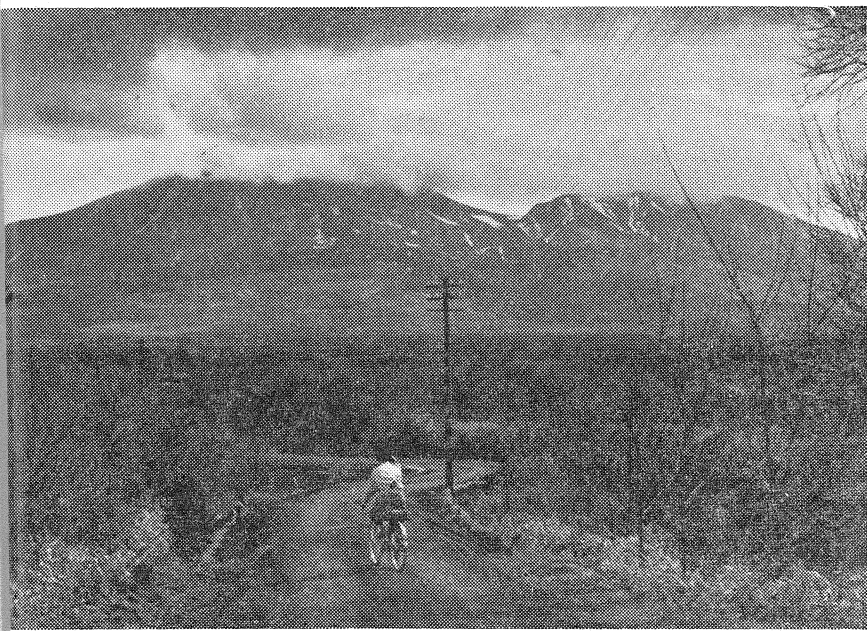
それが、今年中軽井沢で車を受取つてバラスの道を真直にきたら、突然右側に追分の宿の跡が現われた。もはや真中で道を分

けてはいなかつた。そういえば追分の部落も新道からかわされて、北側にちぢこまつているし、軽井沢町と書かれていた。杳掛が中軽井沢になつたのだから、追分が西軽井沢になる日が来ないとは私には保証できないような気がした。

碓氷峠の権現様は、ぬしのためにや守り神

こんな歌詞の追分節に追分の名が残るようになるかも知れない。

浅間高原



「右へ行つても左へ行つても同じですよ。すぐ先で一緒になるから」とわざわざ親切に教えてくれた。多分どちらに行こうか考えていると見られたのだから。中軽井沢から来た中山道の新道は、みればそのまま北国街道の新道になつている。中山道はと注意してみたら、旧分岐点より二〇米ほど先

5・塩名田のハヤ料理

旅に出て食を楽しむとしたら、よほどの努力をしなければならぬ。まして自転車で走つてみると、土地のうまいものを見逃しやすからだ。塩名田のハヤ料理は、旅に出て食を楽し

いぜい四料だろう。ともかくも吾妻川へ抜ける近道として須賀尾峠を選んだ。

んだ一例として、将来にも想出として残るに違いないと思つた。そういう料理が、不

太平洋側からの塩の移入路であること、また岡谷、諏訪には甲州を経て入つてきたと

雄大な連峰を春霞の中に望み、蓼科山のおぼろな姿をゆつくり眺めることが出来た。

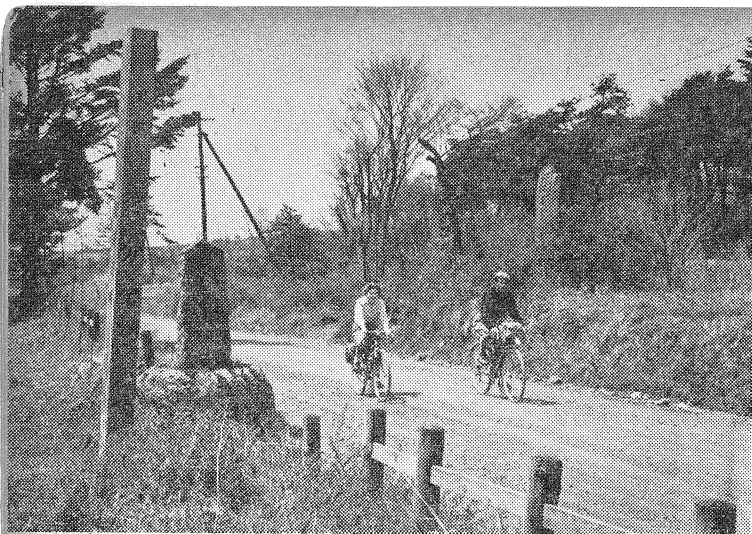
いぜい四料だろう。ともかくも吾妻川へ抜ける近道として須賀尾峠を選んだ。

さしかかった。草叢の高みが右に北国街道左に中山道と道を分けていた。牛馬を左右

んだ一例として、将来にも想出として残るに違いないと思つた。そういう料理が、不遇をかこつ中山道筋にあることも楽しかつた。

塩名田は中山道が千曲川を渡ろうとするところにある。川を狭んで西側は御馬寄といういわくあり気な名前の部落だ。いわくあり気といえば塩名田も例外でない。こんな山奥に塩と名がつくのが変である。塩商人が越後から入つてきて市をなしたか、或は塩の出る山があつたのか。大町が北陸からの塩の移入路であること、甲州の鹹沢が

追分



太平洋側からの塩の移入路であること、また岡谷、諏訪には甲州を経て入つてきたと、昔の塩のルートはいくつか読んだ記憶があるが、塩名田は残念ながら、博学の今井氏をもつても、ようとして話は進まなかつた。そんな詮索をするには不似合なほど今年もパーティーは呑気な旅をまず目的としていた。だから塩名田にきたらまずハヤを食わねばならなかつた。

塩名田は一昨年も来た。小諸から入つてきたのである。今年の中軽井沢、追分、岩村田を経て塩名田に入つた。私たちは昼飯どきを一時間半もやりすごしてしまつた。

竹酒屋というのがハヤ料理屋である。今井氏の友人が川向うの五郎兵衛新田の出身とかで、この辺にくわしく、今度の旅にはこの竹酒屋を教えてくれたわけである。竹酒屋を探すのは手間どらなかつた。町中の舗装路がカーブして千曲川の橋まで下ろすとすると、右側の急な坂を下りれば、あとはペダルを踏まずにいける距離である。千曲川を窓の下に見る料理屋で、北西には浅間山がみえていた。

鳩山一郎氏が好んで訪ねた家とかで、部屋には鳩山一郎氏の書が額にして飾つてあるのが目立つた。軽井沢にいて腹がへつたからハヤでもというわけで、ここまで車を飛ばしたのだろうか、距離にして三〇軒に充たない。ものの三〇分あれば着く勘定になる。ところが私たちは自転車だから二時間余りかかつた。そのかわり浅間山をゆつくり眺め、岩村田に入る手前では八ヶ岳の

山道はと注意してみたら、旧分岐点より二〇米ほど先の努力をしなければならぬ。まして自転車で走っていると、土地のうまいものを見逃しやすからだ。塩名田のハヤ料理は、旅に出て食を楽し

雄大な連峰を春霞の中に望み、蓼科山のおぼろな姿をゆつくり眺めることが出来た。そして林檎の花が白く咲き乱れているのを眺め、柳が青い若芽をそよがせているのを見た。更に、申分ないほど腹が減つて

カラ揚と天ぶらが出来る。いずれも八〇円だという。両方頼んで食事にした。カラ揚のハヤの味は格別だつた。ビールをつけられないのが惜しまれるようなうまさであつた。機会があつたら、もう一度寄りたいと思つたことであつた。

6. 峠の旅情

私が双輪の跡を残した名古屋への道は、おうむね山の中を走つているといつていい。東京から渋川までと、瀬戸から名古屋までを除けば、あとはすべて山の中である。かけた時間でいえば八割以上が山の中ということになる。それほど山の中を走つても峠には峠の、別の旅情があるから面白い。思うに峠の旅情は、自転車のスピードの変化にねぞすものかも知れぬ。

須賀尾峠

須賀尾峠は人の気配のない道だ。薬師温泉を出るとすぐ峠にかかるが、私たちの訪ねた昭和三年には、新道の工事が進められていて、そこだけには多勢の人が働いていた。自転車越えられる峠かどうかとも知れなかつたが、部落の人に聞くとか越せそうだつた。峠は一、〇四八米で下の部落との標高差は三〇〇米程だ。距離もせ

いぜい四軒だろう。ともかくも吾妻川へ抜ける近道として須賀尾峠を選んだ。人気のない峠だつたが楽な峠だつた。自転車はオールランダーのバーにつけたライトツーリスト型だつたが、FWに一九Tのスプロケットをつけてあるので半分ほどは踏むことができた。

須賀尾峠は落葉松の美しい峠だ。そのうへ美しい緑の草が一めんに敷きつめられている。頂上では仰向けに寝ころんだ。思えば、自転車で越す峠に、これほど美しい緑の草の上で寝ころべるところが、どれほどあろうか。私の記憶には殆どない。須賀尾峠は緑の美しさに人を酔わす峠だと、私の想出は語りかけるのである。

一六〇米ほど標高が下つた向う側は、白根山のよくみえるところだつた。恐ろしく急な勾配も、オールランダーのバーで楽に下ることができた。

笠取峠

年輪がどれほどたくさんあるだろうかと思われる程の松が、街道に並木を作つていた。往時の中山道を偲ばせる立派さだ。それにしても何と道がいたんでいるのだから。バスは、この下の立科町までしかきていない。そして蓼科山の方へそれていく。中山道が不遇をかこつているとすれば、これほど見捨てられた道はないだろう。そんな道が笠取峠への東側の風景を淋しくしていた。

私たちは四人連であつた。今年の五月の連休の第一日である。塩名田でたべたハヤ

料理も、ようやくエネルギーを失いつつある頃だった。とにかく道の悪いのには閉口した。自転車はクラブモデルだが、ギヤレインオだけはワイドで、ツーリングタイプダブルチェーンホールがついていた。だから歯が立たない筈はないのだが、それにしても一寸こたえる道であった。

高校生の三人連れと会った。もう五時近いというのに、今日中に下諏訪に帰るといふ。おそらく夜半も相当遅くなるだろう。三人共、実用車に大変な荷物をつけていた。彼等は私たちより先に行った。峠の頂上

笠取峠

がみえたとき、頂上で休んだ彼らは一斉に腰を上げて勢よくダウンヒルを始めた。その立上りがいかにも高校生らしくて、可愛くもあつたが、吹き出したくなるほどおかしかった。

下りは美しいカーブの道であつた。美方の原の山が、高く正面にはだかつていた。

和田峠

島崎藤村が初めて東京に出るとき、和田峠を歩いて越えたという。いまならさしずめ中央線で諏訪から甲府に向うに違いはない。そこに隔世の感がある。もし和田峠の

和田峠

昔を知っている人が生きていたら、峠の道に隔世の感をいだくだろう。昔を知らぬ私でさえ、昔はこうもあつたか、ああもあつたかと臉を閉じればその姿が想像できるような気がする。和田峠とは、そんな時代の變遷を考えさせる峠であると思う。

鰻の寝床のような細長い部落の、細くて勾配の急な道をゆつくり走るとき、夕暮ではあつたが、昔の宿場の雰囲気を感じた。軒をいつばいに道までせり出して連わっているのもそうなら、美しく丸く刈り込まれた松があるのもそうである。私たちは今年の

塩尻峠

五月はじめに、この和田の竜月という宿に泊つた。和田峠をゆつくり登るためである。

和田もそうだが、峠の途中の唐沢という部落も、刈込みの美しい松の目立つところであつた。大名行列が通つたら、どれほど似合うだろうと思われる松である。昔の和田峠の途中の休憩所だった唐沢であつてみれば、松に昔から伝わる袴持を表わしたとしても不思議はない。そんなことを考えると、松は美しく刈り込んであるゆえに哀しげであつた。もうすべては流れ去つて、

今では丸子町と諏訪

を結ぶ国鉄バスの一停留所があるにすぎないのだ。

三分の二も登つたと思われるところに、接待という停留所がある。家は道の両側に一軒づつしかない。それでも電燈がある。昔、荷を運ぶ馬に麦を喰わしたので、接待という名がついたとか。その日はよく晴れていて、黄水仙が滅法明るく眼を刺した。小高い所へ登つて石碑を読んでいた今井氏



が駆けおりにきた。そしてこんな話をしていた。

「の時間がかかりますか？」とたずねてみた。検車係氏は

諏訪湖が、そして岡谷と諏訪の町が光り、遠くに八ヶ岳の雄大な連峰がたたなわり、

勢の観光客を運んできた。峠というより展望台といった方が塩尻峠によく似合うよう